

1966 • 代表作時代小説

日本文藝家協會編

昭和四十一年度

代表作時代小説

編纂委員

尾崎 秀樹 村上 元三
富田 常雄 山岡 莊八
武蔵野次郎 吉田 健一

東京文藝社刊

昭和四十一年度

代表作時代小説

七五〇円

無検印
承認

昭和四十一年九月二十五日印刷
昭和四十一年九月三十日発行

編纂者 日本文芸家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(三六)二五五〇

まえがき

曾て時代小説というものを毎月の雑誌に載っている限り読んでいたことがある。その役を買って出たので、買って出た後はいやでも読まなければならなかつたのであるが、それでもそれが寧ろ楽しみだつたことは、時代小説というものが読むに足る小説を作者に書かせるのに、又そういう作者を育てるのに必要な条件を特に備えていることを示すものかと思う。勿論、これは日本での話であつて、日本を離れての一般論をするならば、或る形式の文学が他の形式のものよりも日本文学であるのに適しているなどというのは大して意味をなさない。併しここではもともと日本での話をしているのである。

それで、そういう時代小説の条件の一つに、時代小説では或る程度の嘘をつくこと、或は架空の事情を混ぜることが避けられないということがある。全く不思議なことに、日本では小説で現にあつた事件と少しでも違つたことを書いてはならないという一種の不文律があつて、その考えに従えば、小説というのは実録の別名だということになる。何故そういうことになつたかをここで詮索している暇はないが、これが凡そ小説というものの性格

を無視した注文であることは説明するまでもないことで、それがその通りに行われたことがあるかどうかは疑しくても、これが小説、殊に現代小説を書くのに極めて不自然な圧力を加えて来たことは確かであり、所謂、本当のことばかりを小説で書くということはあり得なくても、小説家が想像力を働かせる毎に何か引け目を感じるようになるのでは、そういう小説家が書くものに小説らしい小説を期待するのは難しい。

現代小説が殊に被害が大きかつたのは、今日のことならば実際にあつたことかどうか判断がし易いと一般に思われているからである。併し時代小説の場合は、もし実際にあつた通りと考えられることを書くならばそれは歴史であり、それと区別しての時代小説である以上、小説というものに対する日本での奇妙な偏見がどうだろうと、小説の要素がその時代小説に入つて来ることは避けられず、寧ろそれが求められないではない。鷗外の歴史そのままと歴史離れの問題がそこにあつて、鷗外は優れた伝記も、歴史小説も書いて我々を楽ませしてくれるが、鷗外が書くものが既にその時代には高等講談ということで軽蔑されていた。彼が小説と呼ばれる愚にも付かない日記の出来損いのようなものを書かなかつたからである。そしてその後、時代小説と銘打つて優れた作品を書いた人達も、これは今日それを書いている人達でも、或る種の軽蔑の念で迎えらるゝことを免れないとともに、やはりその書いたものは本式に小説と呼ぶに足る想像力の産物であつて我々を楽ませしてくれる。又、もしそういうことをお望みならば、我々に人生に就て教えてくれる。

つまり、日本の現代文学で最も歪められた小説の分野で、時代小説だけはそれが歴史ではないという前提と、それから恐らくはそのことが伴う多少の侮蔑の念によつて僅かに小説であることを許されたのであると言える。これは、時代小説だけは本式の小説であることが必要だつたということでもあつて、それには作者が小説の技術を身に付け、小説家としての腕を磨かなければならず、その結果が我々が時代小説と手軽に呼んでいる幾多の作品なのであり、何十年か後に日本の現代文学というものが改めて検討される時、その小説での分野は主に時代小説の作者達によつて開拓されたということになるかも知れない。それだけのものが日本の時代小説にはあつて、これはこの集に収められた数々の作品からも納得出来ることである筈である。少くとも、過去の時代にも人間が生きていたということに解つて、生きた人間を架空の物語に登場させるのが小説というものであることは、ここで殊更に言うまでもない。

目次

小町とひよつとこ	上総楼の兎	永見右衛門尉貞愛年譜	雪うさぎ	なががれ	アームストロング砲	幕臣一代	自日没	比丘尼の死	かれいの砦	蜺	紅	善童子
富田常雄	戸板康二	武田八洲満	杉本苑子	子母澤寛	司馬遼太郎	柴田鎮三郎	五味康祐	小松左京	神坂次郎	伊藤桂一	池波正太郎	飯澤匡
三七	三〇九	一〇	一三	一五	一七	二五	七	七	五	七	三	九

寵 荒 陰 鳴 血 多 終 野 猫 一 へ
 姫 男 人 賊 色 客 栖 露 者 敷 木
 び の の の の の の の の の の
 謀 弦 は 摩 の の 劍 武 飼 菊 飼 二 両
 び の の の の の の の の の の

永井路子	中山義秀	南條範夫	新田次郎	伏見丘太郎	武蔵野次郎	村上元三	森山啓	八切止夫	山岡莊八	山本周五郎	まへがき 吉田健一	あとがき 武蔵野次郎
二四三	二六九	二八一	三〇一	三一九	三四五	三六三	三八一	四〇三	四二三	四四一		

善^{ぜん}

童^{どう}

子^こ

飯

澤

匡

作者のことは

飯澤 匡

私は最近「異説円空論」（佼成出版社刊）という本を出したが、この「善童子」は、その異説を小説の形にしたものである。円空という俗聖（乞食坊主）を、美術批評家というか美術史家は軽率にも名僧知識の系列の中に入れてしまった。

従来の美術史や仏教史が、上層階級のための寺や僧侶を扱って来たので、その方法で円空もやったわけなのだが、これは飛んでもない見当ちがいで円空は、そんな高級な人々のための宗教者ではなかった。

彼は当時の寺社奉行の取締からは外されている社会の底辺の貧村や寒駅の庶民たちの土俗信仰の世界で専ら活動していた。だからこそ、徳川氏の嚴重な関所も通行して全国を回国勧進して歩いたのである。こういう半僧半俗の俗聖たちの研究は柳田国男先生が先鞭をつけられたのだが、このごろは有力な学者が次第に精細な学問を発表するようになり私たち怠者もそれで啓発されるわけだ。

円空も、そういう民俗学のお陰で私に理解出来ることになったので、彼の融通無礙な生活を少しフィクションを織ませて物語にしてみたのである。

何とも、大どかな今どき珍しい人物に私は惹かれたが、

尼のことは、ただ庵主さんに懸想したらしいという言伝えを私なりに拡大したものであるから誤解のないようにして頂きたい。

「オール説物」に載った時は一水会々員の近岡善次郎画伯が、いい挿絵を描いて下さり、大へん効果が挙げたのを忘れたくない。画伯も、ここ五六年東北の民俗を研究しては画布の上に展開しているので、こういう民俗の世界には、正にびったりであった。

この作に続いて私は「山姥」という、同じく民俗風な作品を、つい先日、発表したが、どうやら私も、このところ、日本の土俗的なものに興味が出来たようである。

著者略歴

本名 伊沢 紀

明治四十二年七月二十三日 和歌山県生

新宿区市ヶ谷左内町二一

文化学院卒

昭和八年朝日新聞社入社。昭和二十九年四月アサヒグラフ編集長を最期に同社を退き作家生活に入る。昭和二十九年第一回岸田演劇賞受賞。昭和三十三年NHK放送文化賞受賞。

日本文芸家協会、演劇協会、放送作家協会会員

一

インクは一応、円空という法名を貰つてはいたが、いつも相手にしてる連中が目に一丁字もない土百姓、それも村里から離れ半狐半耕の暮しをやつてる人間離れした人々だから、彼らの発音しやすいように彼をそう呼んでしまつてゐる。

円空の方も、咎めだてして円空の法名の有難さを示す必要もないことは、とづくに知つてゐる。

百姓たちはインクさんが、有難い仏さんを、そこいらの木材から彫り出してくれることで信用してゐる。

こんな山奥の百姓たちは、たまに里に行つた時、石の仏の前を通ることもあるが、凡そ、寺や神社とは縁のない毎日を送つてゐる。

たとえ親が死んでも、寺から坊さんが来て回向してくれるわけではない。ただ穴を掘つてそのまま入れたり土饅頭をつくり、それでおしまいだ。卒塔婆が建つわけでもない。

おつかない死霊から早く逃れた方がいいと、さつさと帰つて来てしまふ、そんな生活だつた。インクさんに經の一つも唱えて貰つた時、彼らはどれくらい安心したか判らない。

川遊びしていた子供たちが急に腹が痛いといい出し、

下痢を始めると、とめどがなくなり、血を下し次々と死んでゆく。今でいう赤痢だが、そんな時にも、医者なんでものは町医者はおるか、殿様ぐらいしか抱えていない時代に頼れるのは加持祈禱だけだ。

インクは赤腹で苦しんでいる子供たちのために大きな玉を何百と木で彫り出し、それで大きな輪の数珠を作り、子供をその中に入れて親たちに「南無阿弥陀仏」をいわせた。そのお蔭か中には生き延びた子がいた。

天台宗の寺で修行した行者の身で、浄土宗の百万遍念仏をやらせるなんて、乱暴というのは今どきの人のいうことで、インクは百姓を喜ばせ安心させるなら何でも採り入れてしまふ。第一、「そは我が宗門の行事なるぞ」などと、うるさい文句をいう坊主も、そのあたりには居やしない。坊主どもは人の多勢いる村や町に立派な御堂を建てて貰い、そこに金色に光らせたみ仏の像を飾り、ぬくぬくと緋綸子の座布団の上か何かに坐り込んで、寄進の米をたらふく食べてゐる。

そんな坊さんになりたかつた円空は、最初は禪寺に入つたが、残念ながら、煩惱が断きれなかつた。

禪門は女色にうるさい。とうとう逃げ出して、半俗半僧の行者になることになつた。

これなら妻帯も荒行の時以外は自由だ。

しかし行者は、何とかして自分で食べなくてはなら

ない。

高野聖のように、納骨や供養のために金を貰つて歩くほどの才覚がない円空は、根が大工といつても（半農半工）の村の生れだから、幼時から鑿や小刀の使い方は見たり聞いたり知つてゐる。それが生かせないものか？ それまで、ただの自然石などを神として拝んでいた山深い谷間に住む百姓たちも、そろそろ石の仏の有難さを知つて来たのだつたが、石の仏を彫つてくれる石工は遠い町に行かねば居はしない。

円空が仏を彫つたのは、修験者として役のえん小角おすのの先例にならつて山へ踏み入り、一尺でも高いところに登ろうとして、森の中で杣人にあつた時だつた。

彼ら杣人は大きな斧で太い一位の木に刻みを入れていく。やがて大きな幹はメリメリと恐しい音を立てて倒れる。その切口が、荒々しくさく立つ木目を見せているのを円空は、（面白いな）と眺めていた。何だか、そこに荒神様の顔をみたような気がした。

「おれにも貸してくれ」

と杣人から斧を借りると、手近な幹に切りつけてみた。自然、そこに栗書のように現れたのは女の顔であつた。

「へえ、可愛いじやないか、インクさんのいい娘かい？」
杣人は、深山に入つて何日も女房の顔を見ていないの

で、物欲し氣な面をしながら円空をからかつた。

「これは観音さまだぞ。仏だ」

といつてから円空は、あわてた。果して、これが仏といえるか、余り自信がなかつたからだ。どうも、自分がよく夢に見る観音様の顔といった方がよさそうだつた。

円空は杣人には返事せず彫りつづけた。細いところは持つていた小刀で形をつけた。

目が細く切長で、鼻は高く唇も薄く、全体がほつそりとして、凡そ円空自身の面貌とは反対の形が次第に出来上つた。

円空自身は、体も大きく、顔もいかつく、おまけに毛坊主の名の如く伸び放題の髪の毛は縮れて捲き上つていく。

どう見ても恋人の出来る顔ではない。胸に荒縄を幾重にも巻いて数丈の上から落ちて来る滝水に打たれて、合掌して不動の呪文でも唱えている時が一番相応しい男なのであつた。彼が実は煩惱に苦しみ禅寺から逃げ出したにも拘らず、まだ不犯の身でいたのは、何のことはない、女が相手にしてくれないからであつた。

彼は体が火照つて来ると穀断ちをして木食修行をし、滝に当つて心氣を鎮めた。

二

鳥屋市とやいちの部落は、その名の現す通り、鳥と関係のある場所であつた。この山峽を越えようとする渡鳥の群が秋になると、その肥えた体を北国から運んで来る。狡い人間どもは細い霞と称する網をその通り路に張つて、囀を鳴かせて群を誘きよせ、片端から掴みとつて締め殺してしまう。これらが鳥屋である。

そのつぐみの屍の山が、太平洋側と日本海側との町々の旦那衆の口に入るために、朝から取引きされる。それ
が他ならぬ鳥屋市である。

岐阜から高山に通う街道の一つがこの部落を通つていた。円空は高山へ行こうとこの街道を上つて来た。

秋口、まだ台風が荒れ廻つてゐるころは、円空はこの鳥屋市より山裾の禪刹南陽寺にいた。いたといつても寺男としてである。主として庫裡の台所に詰めていて、水を汲んだり湯を沸かしたり、薪を割つたりであつた。

薪を割つて木端が出ると、それで大黒天や宇賀神を彫つて台所の荒神様の御厨子の中に祀り込んだ。

住職は

「円空や、いつそ彫るなら韋駄天を彫つてくれ。あれは台所にはつきものだ。あの強い足で托鉢して廻ると布施が多いのだ」

といつたが、残念ながら円空は韋駄天がどんな姿をしているか知らなかつたので、適当に風神のような裸身のもの彫つた。裸の方が身軽で走り易いと考えたからである。しかし使つた材が細い薪ざつぽうであつたので下半身の足を拡げることが出来ず、「韋駄天走り」という言葉通りのスピード感は一向に出ないのであつた。

「何だ、お前の韋駄天は裸か？ 神将だから甲冑を着てるものだぞ。第一足がすくんで居るじやないか」

と侍僧の意地の悪いのが、遠慮なくいつた。

円空は（そんなものかな）と思ひ、韋駄天は神将の一種と記憶することにした。こんな工合に円空は仏像の形を憶えて行く他なかつた。

台風の時期も過ぎて秋日和が続くころ、円空はこの南陽寺を出て山に向つた。本当は高山に行くつもりだつたのだが、鳥屋市で思ひがけない物にぶつかつたのだ。

それは差し渡し二尺余もあろうという杉の太木が、先日の台風で根もとが地崩れしたため倒れ、大きく道を塞ぎ、田圃にまで届いてゐるのであつた。

面倒臭そうに田圃の持主が梢の方から鋸で挽いては枝を払つてゐる。こうでもしないと今年の稲の作柄に響くからであつた。

「どうだね。私に、この杉の木の始末をさせてくれないかね。細く挽いて薪にでも材木にでもして上げるよ。余

りは仏様を作らしてくれないか」

「仏様だつて？」

「そうだよ。如来様でも薬師様でも白山様でもお望み次第だ」

「この杉は宮座の頭のものだから頭に聞いて御覽」

と頭のところへ連れて行つた。頭は円空を一目見て

「ああ、あんたかね、木端の仏を作るといふのは。力はあるようだ。あの杉を始末してくれるなら飯は食わすよ。納屋で泊つたらいい」

といつてくれた。

仏教が行きわたつていて信仰心の強い人々のいる町では、四辻に立つて「宿を借ろう!!」と呼ばば、善根を持つた人々は仏縁を願つて喜んで宿を貸してくれた時もあった。

しかし、いかつい蓬髪の円空を見ては、なかなか宿など貸してくれない。円空としては一人にでも仏を彫つてやつて、それが喜ばれるとすぐに、それを見た人が「おれにも」といつてやつて来ることを知つている。そして、次々と人は競争的に造像を頼んで来るものだと言ひから心得ているので、最初の一人を捉えてしまえば、かなりの間、その上地に居坐ることが出来るのであつた。

造像の間には病人の加持祈禱、死人の回向と、この巡回行者の仕事は続くのである。

円空は大きな杉の横たわつてゐるのを見て

(これなら半年は居られるな)

と、にやりとした。

三

このあたりは寒冷の地で塩も思うように手に入らぬせいか、足腰の立たぬ老人が多かつた。

円空は病人たちが掌の中に持つて居られるような豆仏を沢山作つてやつた。病人たちは苦痛がいやまざると、これをしつかりと握つて名号を称えて、何となく痛みが遠のいたように感じるのであつた。

円空が驚いたことには、不動明王を彫つてくれという注文が多いのであつた。

このあたりは白山信仰の強いところで、すでにその宮座もあるくらいだから、白山様を所望する人の多いのは当然である。

白山様というと、円空はいつも竜頭観世音を彫ることにしていた。観音様は円空の一番好みのものだ。あの細い目の切長の美女の立像の頭に竜らしいものの面を載せれば、もうそこに白山様が出来上る。

本地垂迹、神仏習合という便利重宝この上ない考えが發明されているのとは別に、百姓たちの心の中には神も仏も区別はなかつた。仏が外国から来たことも、いや、